中国における獣頭人身十二支像の展開

明日香村キトラ古墳の石室壁画に描かれた獣頭人身十二支像（以下、獣頭人身像と略）と大陸で検出されているそれとの比較検討をおこなうために、開元末年（741）までの中国での獣頭人身像を集成した（表6）。これをもとに、中国における獣頭人身像の展開を示すとともに、関連する若干の問題について触れてみたい[1]。

中国各地区における獣頭人身像

当該期の獣頭人身像は、主に以下の4地区で盛行した。

両湖地区　長江中流域の湖北・湖南両省を中心とする地区。獣頭人身像は、隋・開皇3年（583）前後には出現していた可能性があり、8世紀初頭にかけて盛行する。中国において最初に獣頭人身像が出現した地区である。隋・大業年間（605～616）までのものは、それぞれ個性的であるが、拱手した首の短い座像、腹部にたて帯が垂下する、などの共通する特徴を持つ。7世紀中葉には、桂子山墓、咸嘉湖墓例に代表される画一的な施釉座像が出現する。持笏し、方形台座上に正座したこの座像を両湖型と仮称する（図44）。両湖型のものは、本地区からさらに長江を遡った重慶市万県にまでみられ、長江流域に広く分布した可能性がある。7世紀後葉から8世紀初頭には、黄土嶺墓、牛角塘墓、桐子山墓例など、湖南省域内で互いに類似した座像がみられる。両湖型に近いが、これを稚拙にしたような印象をあたえる。湖南省域内で両湖型をもとに生産、流通したものであろう。

図44　両湖型（咸嘉湖墓）

揚州地区　長江下流域の揚州を中心とする地区。獣頭人身像の初見は、7世紀中葉の陶典墓例で、長く延びた首を特徴とする無笏の座像である。無笏の座像という点は7世紀前葉の両湖地区のものと共通する。その影響を受けて本地区の獣頭人身像が出現したのであろう。つづく7世紀後葉から8世紀初頭の楊廟墓、司徒廟鎮墓、高郵車邏墓例はそれぞれ個性が強く、画一的な両湖型が分布する両湖地区の様相とは異なる。しかし、いずれも鐘方正樹が「立像的に伸長化する傾向」と指摘した[2]、頭部と比較すると身部、特に拱手部から下部が長い特徴のほか、広袖の長袍を着て無笏である点などを共有する。こうした特徴を揚州様式と呼ぼう（図45）。

図45　揚州様式（司徒廟鎮墓）

北方地区　北京・遼西を中心とする地区。墓誌蓋の特徴から則天武后期（684～704）とされた薛府君墓例は、広袖の長衫を着て拱手し、円形台座に立つ。こうした特徴は、より新しい両京地区のものに近いが、北京市文物研究所によれば従来の年代観に変更はないという。8世紀前葉の黄河路墓例は両京地区のものとは異なり、窄袖の長袍を着て、束帯を締める（図46）。これらは確実な立像としては最古のものであり、獣頭人身立像の確立時期を考えるうえで重要である。また、唐開元22年（734）の紀年墓誌が出土した鉛箔廠墓例は、詳細不明ながら中国における最古の獣頭人身像壁画である[3]。

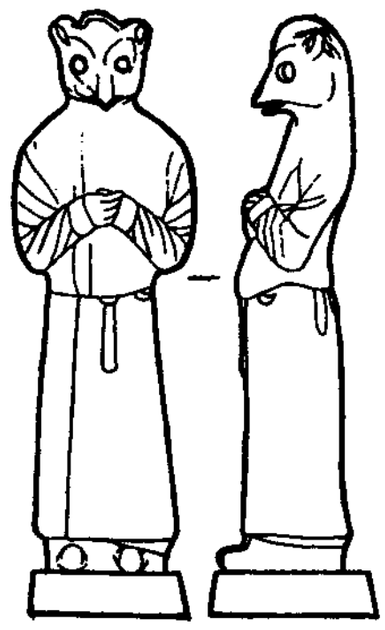
図46　黄河路墓例

両京地区　隋・唐代に都城のおかれた長安・洛陽を中心とする地区。獣頭人身像の出現は、前述3地区に比べて遅く、開元年間（713～741）の晩期、8世紀中葉である。俑はいずれも広袖の長袍や長衫を着て拱手する立像である。両京様式と呼ぼう（図47）。また、本区と密接な関係がある広東・張九齢[4]墓誌の線刻獣頭人身座像は、この後に盛行するこの種の座像のはしりである。本地区の獣頭人身像は、立像俑、線刻座像ともに、いずれも広袖の長袍、長衫を着て拱手するが、これは揚州様式のものと共通する。あるいは、それをもとに形成されたのかもしれない。なお、線刻座像は、両湖型のモチーフと一致した持笏し、方形台座上に盤座するものに転換する。さらに、こうした線刻座像や両京様式の俑は、天宝年間（742～755）には中国全土に広く分布する。

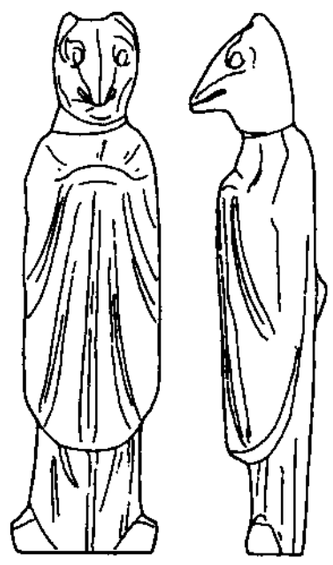
図47　両京様式（李景由墓）

関連する若干の問題

獣頭人身像の出現に関して　獣頭人身像の出現は隋・開皇年間にさ

表6　中国出土の獣頭人身十二支像集成

地区	省	市・県	墓名	時代	俑	壁画	墓誌	備考	参考文献
両湖	湖北	武漢	馬房山墓	隋・開皇3年(583)前後	座像				『考古』1994－11
	湖北	武漢	岳家嘴墓	隋・大業年間(605－616)	座像				『考古』1983－9
	湖南	湘陰	隋大業六年墓	隋・大業6年（610）	座像			十二支獣を付けた人物座像共伴	『文物』1981－4
	湖南	岳陽	桃花山墓	唐初期	○				『中国考古年鑑』1995
	湖南	長沙	黄土嶺墓	唐初期	座像				『考古』1980－6
	湖南	長沙	牛角塘墓	唐初期	座像				『考古通訊』1958－3
	湖北	武漢	桂子山墓	唐·武徳～永徽年間	座像			施釉像	
	湖南	長沙	咸嘉湖墓	唐·武徳(618～626)年間？	座像			施釉像	『考古』1964－12
	湖南	湘陰	桐子山墓	唐初期	座像			施釉像	『文物』1972－11
揚州	江蘇	無錫	陶典墓	7世紀中葉	座像				『文物資料叢刊』1982－6
	江蘇	揚州	楊廟墓	高宗・則天武后期	伸長像				『考古』1983－9
	江蘇	揚州	司徒廟鎮墓	唐前葉	伸長像			三釉像	『考古』1985－9
	江蘇	揚州	高郵車邏墓	唐前葉	座像				『考古通訊』1958－5
北方	北京	北京	薛府君墓	則天武后期	立像			石像	『文物参考資料』1954－8
	北京	延慶	鋁箔廠墓	唐・開元22年（734）		○			『中国考古年鑑』1992
	遼寧	朝陽	黄河路墓	8世紀前葉	立像				『考古』2001－8
両京	陝西	銅川	華陽小区史氏墓	唐・開元24年（736）	立像				
	河南	偃師	李景由墓	唐・開元25年（737）	立像			鉄像	『偃師杏園唐墓』
	陝西	西安	楊思勗墓	唐・開元28年（740）	立像				『唐長安城郊隋唐墓』
その他	四川	万県	万県冉仁才墓	唐・永徽3年（652）	座像			施釉像	『考古学報』1980－4
	広東	韶関	張九齢墓	唐・開元29年（741）			座像		『文物』1961－6,『広東出土晋至唐文物』

かのぼるが、この時期、十二支の動物像をもつ鏡や墓誌が流行した。獣頭人身像による十二支表現もこの流行を背景にあらわれたものだろう。また、獣頭人身像自体の出現は、仏教の盛隆と関連づけたい誘惑にかられる[5]。十二支と十二神将の融合はよく知られている。南北朝期から初唐にかけては、十二神将が説かれる『灌頂経（薬師瑠璃光経）』（宋・大明元年（457）、慧簡訳）、『薬師如来本願経』（隋・大業11年（615）、達摩笈多訳）、『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（唐・永徽元年（650）、玄奘訳）等が漢訳され、盛行した。敦煌莫高窟の事例などをもとにすれば、仏教側では十二神将の偶像化が十二支との融合をおこしながら進行していた[6]。それと並行した伝統思想側での反応が獣頭人身像の出現に結実したと考えられまいか。この問題については、この時期における両湖地区の信仰状況等を明らかにする必要がある。

キトラ古墳獣頭人身像との関連　キトラ古墳例の年代が7世紀末ないし8世紀初頭であり、立像であるということからすれば、その源流は、獣頭人身像が出現していなかった両京地区や座像を基本とする両湖地区を除く地域、特に、長江流域以北の地域である可能性が高い。この時期、揚州地区では像の伸長化現象が起こり、北方地区では立像が出現する。これらについて、両地区を結ぶ大運河などの交通路を紐帯とする一連の現象、すなわち、立像化・多様化をともなう獣頭人身像の交通路に沿った分布域の拡大とみることができる。そして、その過程で生じた変異の一つがキトラ古墳の獣頭人身像の原型となったという仮説を提示したい。この仮説を検証するためには、両地区間に位置する山東・河北両省の獣頭人身像の状況を明らかにしなければならない。また、中国の獣頭人身像には、キトラ古墳例のように武器をもつものはみられない。十二神将との融合や同様のモチーフをもつ新羅の獣頭人身像を視野に入れる必要がある。

その他　両京地区で獣頭人身像の出現が遅れるといった興味深い現象についても分析が必要であろう。

（加藤真二）

（追記）原稿執筆後、西安市孫承嗣夫婦墓（『考古与文物』2005－2）で両京様式のものが出土したことを知った。開元24年（736）で両京地区では最古のものという。

註

1）各例の年代は主に斉東方『隋唐考古』、2002年に依拠。
2）鐘方正樹「獣頭人身の十二支像」『博望』3、2002年。
3）北京市文物研究所のご教授。
4）張九齢は玄宗朝で活躍した宰相。荊州（湖北）長史に左遷後、死去し、出身地の韶州（広東）に葬られた。
5）十二支像出現の契機を仏教に求めることには、網干善教の強い警告がある。網干善教「十二支の展開と獣頭人身像」『関西大学博物館紀要』9、2003年。
6）莫高窟壁画では、隋代より十二神将らしき姿がみられるが、唐貞観16年（642）開窟の220窟北壁で十二支の動物像をつける十二神将画像がはじめてあらわれる。